# 慶心会長のあいさつ

赤石　誠（５７回生）

私は、今年の１月に古希を迎えました。まだ現役の医師として仕事を続けています。自分が７０歳となり、自分自身の年齢を意識するようになりました。すると、徐々に医師としての考え方が変化してきました。より一層、患者さんの気持ちが理解できるようになったということでしょうか。

それと同時に、自分が目指していた医師の理想像が徐々に変化してきたことに気づきました。今まではベストワンの医師になることが自分の目標でしたが、今は、オンリーワンの医師になることが私の理想であると思っています。自分の目指す目標がいつ頃から変わったのかは自分でもわかりません。年齢を重ねているうちに、価値観が徐々に変化してきたのです。子供にとって母親は一人しかいません。どんな女性でもよいというわけにはいかないのです。それは患者さんにとっても同じです。若いころの患者さんはより腕のよい医師を求めていましたが、その患者さんが年齢を重ねると、この医師でなくてはならないという医師を求めるようになってきていることに気づきました。オンリーワンの医師を求めていることに気がついたのです。これは、急性期医療と慢性期の二次予防を担う循環器疾患の医療なので、患者さんと長いお付き合いをしたためであると思っています。そしていつの間にか、自分は、患者さんから見てオンリーワンの医師になっていることに気づきました。そうであれば、それに徹しようというのが、今の私の心境です。

今年で、私の会長の任期が終わり、次期会長の井上宗信先生に、バトンタッチいたします。これからも井上先生の下で、慶心会がさらに発展してくれることを願っております。慶心会は、大学時代のわだかまりを捨てて、再び仲間として交流し、協力する絆の組織です。大学医局の傘下にある組織ではありません。私自身、大学にいたときは面白くないこともたくさんありました。しかし、大学を離れても、慶心会の絆は私にとって素晴らしい拠りどころでした。ぜひ、この慶心会を皆さんで今後盛り立てていただきたいと思います。

会長を退任するにあたり、いくつかのお願いがあります。慶心会は、OB の方々からの会費で運営していますが、会費の納入状況が芳しくありません。慶心会誌の冊子発行にも経費がかかります。また、若手医局員がビアーアーベントに気軽に参加してもらうために、経済的な補助も続けていきたいと思っています。事務局では、慶心会誌の電子書籍化などの経費削減なども検討していると聞いています。

慶心会は、慶應義塾大学の循環器内科で一緒に学んだ仲間の絆を深める会です。慶應の循環器内科を創設した中村芳郎先生を慕って集まった仲間たちが、慶應循環器の発祥です。中村先生は、厳しい指導でしたが、患者思いの優しい医療を実践なさるダンディな先生でした。そこに私たちは惹かれていたのです。今は、その直弟子は、今の大学医局にはほとんどいなくなりました。

50 年前は、わが循環器グループは、慶應の中で弱小グループでした。そのグループが、今や我が国だけでなく、世界の循環器を牽引する集団に発展したのは感慨深いことです。最先端の医学を実践しながら、患者ファーストの「慶應医学」を引き継いで、実践してくれていることを嬉しく思っています。

慶心会は、OB の絆を高めることが目的です。しかし、それに加えて、日本の循環器内科医が気持ちよく働ける診療環境を作るべく、慶應義塾大学循環器内科を通して支援し、循環器内科を志す若手医師が増えることを強く願っています。

慶心会は、共通の目標のために、共に働いた仲間の集まりです。これからも、絆を深め、仲間を助け合って共に伸びていくための会でありたいと願っています。（慶心会会長、ウェルエイジング日本橋クリニック院長）